

第12回 京都建築賞 結果発表

主催 一般社団法人 京都府建築士会
後援 京都府・京都市・宇治市

建築

京都建築賞は、京都府建築士会の創立60周年を記念して創設されました。京都の歴史的文脈を踏まえつつ創造性の高い建築作品を表彰し、その活動及び業績を広く社会に伝えることにより、京都及び建築の継承・発展に資することを目的とするものです。第4回からは、次代を担っていく建築士の支援を目的として、京都建築賞に特定のテーマを設定する新たな部門「藤井厚二賞」を創設しました。

特別賞

京都競馬場スタンド(ゴールサイド)

設計者 橋本和典・高野直樹・宮武慎一・

中村理恵子・三井貴裕 (株)安井建築設計事務所

最優秀賞

インダ本社

設計者 小幡剛也・伊藤 剛 (株)竹中工務店大阪一級建築士事務所

優秀賞

ザロイヤルパークホテル アイコニック 京都

設計者 梅田善愛・谷地建児・市川 徹 (株)竹中工務店

奨励賞

末富青久カフェスタンド

設計者 田中亮平 (株)G ARCHITECTS STUDIO

葵の家

設計者 岸川謙介・小寺彩子 (一級建築士事務所) 〆〆〆

「審査委員会」委員長 竹山 聖 (株)設計組織アモルフ

委員 井上章一 (国際日本文化研究センター 所長)

永山祐子 (有)永山祐子建築設計

古代象形絵文字作家 竹本大亀氏
プロフィール

1952年、滋賀県大津市生まれ。高等学校にて芸術科目として書道を選択、ライフワークとして書アーティストへの道を歩む礎を高校生時代に築き、書一筋の人生を歩み、独自の世界を築いている。漢字のルーツが絵文字であることに注目。現代の文字は絵・絵文字が記号化・符号化いわば文字化したもの、またそれは絵が抽象化したものとも言え、現代の文字を具象化することで絵文字ならではの表情や生命感を再現し、書道界に新境地を開き独自の世界を展開している。

甲骨文字や青銅器文字を用いて、世界平和や人類の幸福を神に祈願するという揮毫活動を行っており、初回は1997年の阪神・淡路大震災後の復興を祈願して生田神社で行い、以後、青蓮院門跡・清水寺・八坂神社等で奉納祈願揮毫を行う。2012年以降は京都・松尾大社の正月行事として神に通じる古代神聖文字にて、この一年をこの文字のもと、ポジティブに歩むという1字を募集、奉納祈願揮毫を行っている。

2024年 京都建築賞 審査総評

審査委員長 竹山 聖

あまり大規模なものがないのが京都建築賞のこれまでの特徴だったかもしれない。それは京都という場所の特性を反映していたとも言っているだろう。細分化された土地に立つ細やかな配慮を凝らされた建築や、古い由緒を引き継ぎながら紡がれていく改修など。

しかし今年は京都競馬場という、伝統も由緒もありながら、とはいえそれらはもともと西洋由来の新しい興奮と歓楽のプログラムであり、日本の伝統とは関わりなくしかも郊外に立地していて、ただしというかなお淀という独特の地形的特異点に立つ、そんな巨大建築が受賞の対象となった。

「京都競馬場スタンド」は、競馬場のスタンドとしては珍しくアイデンティティーのある形をもち、構造的にもユニークで美しく、愛されてきたが、これを新しい姿に蘇らせる試みである。そしてさらに社交の場を充実させ、子どもたちも楽しめるパークともなっている。

実は京都はこうした特異点を付与するとも歴史のなかで多く繰り返されてきて、最大の容積を持つ木造建築や、最高の高さを持つ七重の塔も建立されてきた。対比が際立つ、ということも都市美の重要な手法であることは、ローマやフィレンツェやパリやニューヨークやイスタンブールの「C」を思い浮かべるまでもない。お行儀よく揃った街が必ずしも魅力的でないのは、世界中を見渡してもすぐ理解されることだろう。

もとより街並みの観点から語るべきでもない立地であるが、むしろ街並みや美観などといったしがらみを断ち切ったところののびのびと展開された壮大なスケールが（もちろん競馬場というプログラムがそれを要請しているのだが）潔く美しい。

この作品を特別賞とすることは早くに決まり、あとは京都のしがらみのなかでどのようにあがき苦しみつつ京都の新しい可能性を示しているか、という観点からの評価作品となった。いずれも京都の街中にある。

「末富 青久」は、しがらみを見事に逆手に取って、街路と建築の隙間に寄生するという独特のスタンスを勝ち得た店舗である。

江戸時代までは街路と町家の間を隔てる表皮一枚、つまり町家のファサードは、私でも公でもないコモンと位置付けられ、街並みも揃っていたが、明治になって私と公の区別しなくなってきた。その「間（コモン）」がなくなってしまう。基本的に私のほうに属することになってしまったので街並みは揃わなくなる。ところが道路拡張であったり都市整備であったりさまざまな理由で、このような薄皮一枚の土地ができてくることもあったのだろう。そこに奥行きのあるほんのりとした場所が生まれ、ここにファサードだけの建築を作り店舗として成立させてしまおうというアイディアが出現した。素材や色の工夫も相俟って、おそらくこれまでで最小の京都建築賞建築となった。

「葵の家」は、閑静な住宅街に立地して

いる。街中ではないから伝統や街並みといったしがらみからは自由だが、ガラス張りやで開かれたつつ秘めやかな暮らしを守るという矛盾した課題を実現している。屋根は複雑な形状に見えるが、棟の方向と屋根面の切り取り方が独自なだけであって、実はシンプルだ。そのなかに見え隠れしながら点在する様々なスケールの空間が立体的に展開している。道路や隣接地との距離の取り方も巧妙だ。伝統的な形も使わず、かといってモダンで斬新というわけでもない。そうした独特のスタンスもウィットに富んでいて新鮮だった。

この「末富 青久」と「葵の家」が奨励賞。そして規模のまずまず大きい（京都競馬場や、他の都市の大建築に比べればとても大規模という言葉が使えないが、京都としては二つの建築が最優秀と優秀賞を争った。いずれも甲乙つけ難いよさがあり、議論が重ねられたが、最終的に「ザロイヤルパークホテル アイコニック 京都」が優秀賞、「インダ本社」が最優秀賞となった。

「ザロイヤルパークホテル アイコニック 京都」は、御池通という、五条通とともに戦時中の延焼を防ぐためもあって拡張された、京都でももっとも広い並木道に沿っていて、目の前に祇園祭の山鉦巡行を眺めることができる。そこに向かってできるだけ大きな窓を取ることが設計の課題であつたろう。一階には都市空間に接続しながら、しかもホテルのパブリックゾーンとして守

られてもいる豊かなスペースを計画すること。そして各室のクオリティーを保ちながらある程度以上の客室数を確保すること。こうした課題に、構造的にも機能的にも明快な解決を与えながら、見事に応えた建築である。外側はグリッド状の端正なデザインであるが、縦に通る柱状のエレメントのコーナーが斜めに削られていて、内から外への開放感を与えつつ端正なシルエットとリズムをもつファサードを生み出している。

「インダ本社」は、京都中心部の東縁を走る東大路に面していて、最上階からは大文字を望むことができる。水平方向に長い距離をもつ建物であるが、これを適切にアーティキュレートし、周囲の建物のスケールになじませた形姿を工夫して、伸びやかなファサードを実現している。敷地内に庭園をもつのだが、かつては私有地であったこの庭園を本社ビルのエントランスホールにその開かれた池庭として再構成し、さらにその池に面して庭を囲むように会議室を配している構成も巧みだ。外からは内部がうかがえないが、通り庭的に表通りと裏通りを結ぶ車の動線など、一步中に足を踏み入れると思いの外広々とした空間が展開している。そうした表と裏の対比の美学もいかに京都的だ。

最優秀、優秀の2作品とも、京都の街のしがらみを自らの糧として、新しい可能性を示唆してくれた。

京都競馬場スタンド（ゴールサイド）

特別賞

設計者：橋本和典・高野直樹・宮武慎一・中村理恵子・三井貴裕／(株)安井建築設計事務所



外観（バドック側）

所在地／京都市伏見区
用途／観覧場
竣工／2023年3月
敷地面積／598,081.75㎡
建築面積／22,932.35㎡
(スタンド全体：36,922.70㎡)
延床面積／65,073.25㎡
(スタンド全体：117,564.15㎡)
構造規模／鉄骨造
一部鉄筋コンクリート造

写真撮影／(株)近代建築社・(株)伸和



外観（馬場側）

【講評】

1930年代にできた初代の競馬場は、当時異彩をはなっていた。建築の玄人筋だけがほめたのではない。競馬場につどう一般人の多くが、格好良い建物だととめていた。モダンデザインの初期を京都の郊外でかざる、その記念碑めいた作品でもあった。

今回の増改築も、なかなか見事に仕上がっている。初代らしいの骨格を、じゅうぶんリスペクトしつつ、あらたな工夫もありこんだ。そのありかたは、京都という街で建築を考えるさいに、くりかえし参照されて良い。

レース場に面した立面では、客席の手すりや大屋根の端部が水平にのびていく。スケールの大きさもあり、その印象はさすがしい。最上階で、わずかにとびだす突起状の部分も、あざやかなアクセントとなっている。

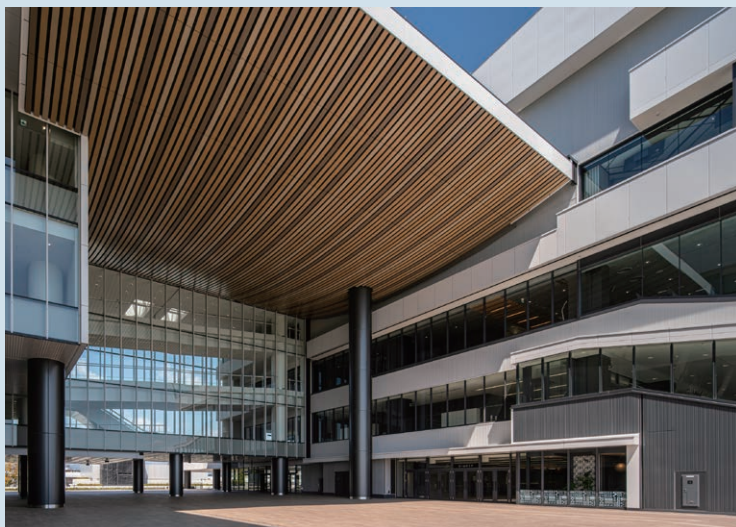
京阪電車側へ面した側では、さまざまなヴォリュームがたくまれた。これも、まことにあざやかな仕上がりをしめている。おそらく、多くのデザインスタディがかさねられたのだろう。その努力は、多としたい。

これとひびきあう内部の空間分節にも、脱帽させられた。こういうデザインの大きな構成については、文句のつけようがない。

ただ、内装の装飾的な仕上げについては、ややとまどわされた。それぞれが悪いというのではない。ただ、細工のいちいちが、いかにも小粒である。全体の大きなすばらしさは、そりがあわないように見えた。

玄関側の表に展開された市民むけの公開空間はありがたい。競馬に関心のない人々へむけたサービスに、ここはなっている。建築がはたしうる社会参加のありかたとして、評価されてよい。

（井上章一）



2階 接続エリア



3階 モール



2階 バドック側テラス



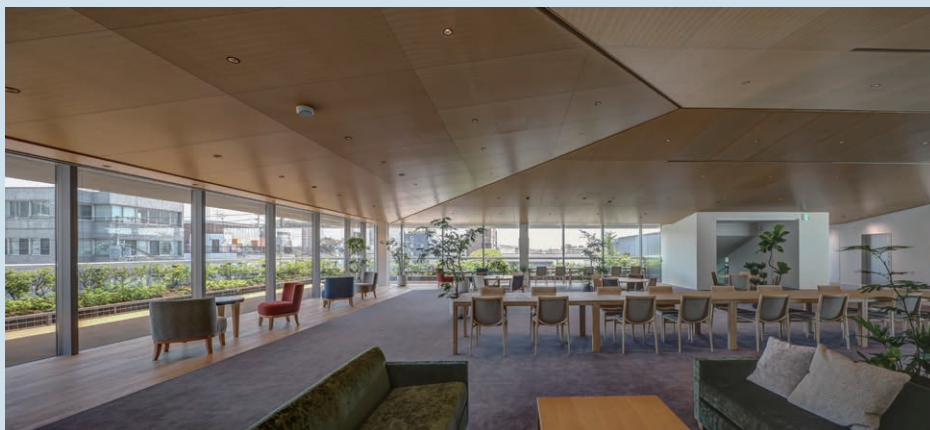
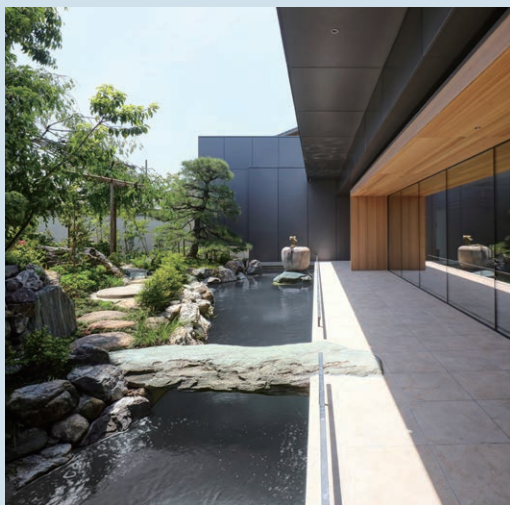
6階 特別室



【講評】

明治26年創業のハカリメーカーの新社屋。東大路通りに面して堀で隔てることなく、一見すると社屋というよりも大邸宅の構えにも見える。少しづつずれながら積層された水平の庇の重なり、ところどころ現れる壁面もそれぞれの場合にあったマテリアルに分割され、社屋建築にありがちな重い壁面は一切なく水平ラインの先は外部に、特に庭に抜けている。この庭は創業当時の旧会長邸宅の庭。この庭を今回、本社と庭として開放している。エントランスを入ると、この見事な庭が目の前に広がり、エントランスホールから続く凝灰岩のテラス床は鯉が優雅に泳ぐ池の上に続く。1Fの庭を囲む応接室は庭の高さからやや下がった高さに下げられ、座った視線から庭を望むことができる。応接室を下げる所作は中からの眺望のみならず、東大路通り側の60m接道した建築のボリュームを下げることで周囲の街並みに対して建築の圧迫感を軽減すること、また新しく建てられた会長宅からの抜けを確保することへ配慮されている。建物内部の執務空間は空間ごとに有効な位置にハイスайд、トップライトが設けられており、自然光に誘われる形で中を巡ることができる。2Fの南側のテラスからは庭園をのぞみ、3Fの東側のテラスの先には大文字が見える。3Fの寄棟の大屋根を活かしたほんの少し外の光を拾って反射する勾配天井が周囲の景色へと視線を誘い、なんとも気持ちの良いラウンジ空間が広がっている。丁寧にこの場所の可能性を拾い上げ、建築的な解決でここにしかない空間を作り上げている。

創業家を守り続けてきた歴史ある場所を引き継ぎながらも、創業家の庭を社屋側に開放し、堀を設けず、街と良い距離感を持つて開く建築の有り様は、ここで働く人、訪れる人、街に対してオープンに開いていこうとする会社の姿勢を体現している。この建築の佇まい



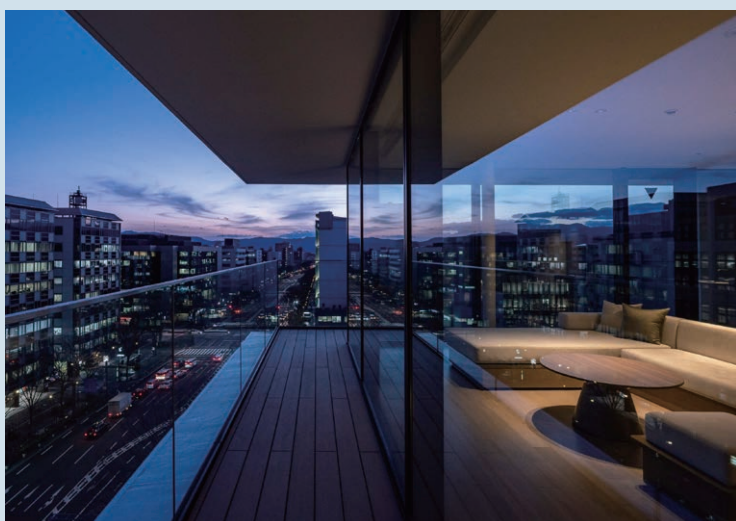
所在地／京都市左京区
用 途／事務所
竣 工／2023年4月
敷地面積／2,810.95㎡
建築面積／1,883.68㎡
延床面積／3,994.88㎡
構造規模／S造 3階建て

そのものが、これからの社会における会社の
在り方の良い事例と感じた。
(永山祐子)



【講評】

審査資料を目にして、まず感じたのはとても明快な構造形式だった。60cmの壁厚を持つコアから跳ね出したボイドスラブの上に配置された開放的なホテル個室群、そしてなんと外部となったコア中心にも個室が配置されている。ホテルは最も事業者に空間効率と作業効率を求められる。その中でこの明快な構成にとても興味を惹かれた。御池通からエントランスを入りコアを取り巻く回廊を進むといつの間にか2層吹き抜けのエントランスロビーに入る。このロビーはレストランとパティスリーの2店舗に接している。レセプションはコアの外側に効率的に収められている。内装も建築担当である設計者が手掛けたということ、とどこころに設備スペースをうまく隠し込む工夫がなされていたり、コアの厚みの見せ方など、建築の構成に素直にそしてその魅力を最大限活かしたデザインとなっている。大通りに面した客室は図面を見た時に一番謎であった外壁面の少し内側に折れた壁の存在理由が現地で分かった。大きく開けられた開口の横のポケットスペースを有したこの壁は室内のベッドの枕元を適度に外部から守り、そして優しい光だまりを作る役割を持っており、外部からのアクセントにもなっている。そのような工夫は随所に見られサッシの、鉄骨となっている横棧はテーブル程度の高さとなっており、小さなガラスが置ける程度の窓台となっている。祇園祭の折にはこの窓台にたくさんの人が並びガラスを片手に楽しむ様子が想像できる。コーナーの部屋は角柱を左右に分け、その間にビタリとデスクが設置される。このコーナーからの開放的な眺めは今回の構造形式が生んだこの特有の体験である。コア側に配置された3つの小さな部屋。コア側がどこからも見られない条件であることからガラスボックスのシャワールームがコア側に設置されており、コンパクトなが



「この部屋ならではの開放的な体験が用意されている。」

ホテルの設計では本体設計とインテリア設計が分けられていることが多いが、今回のように全てのデザインが一貫していることで、建築の建ち方に素直なインテリアデザインがここにはない体験をさらに魅力的なものにしていることを感じた。
(永山祐子)

所在地／京都市中京区
用途／ホテル
竣工／2022年1月
敷地面積／1,044.66㎡
建築面積／914.21㎡
延床面積／7,399.06㎡
構造規模／RC造 一部SRC、S造

写真撮影／母倉知樹

設計者：田中亮平／(株) G ARCHITECTS STUDIO



所在地／京都市下京区 敷地面積／10.17㎡ 構造規模／木造 1階建て
 用途／物販店 建築面積／10.17㎡
 竣工／2022年10月 延床面積／10.17㎡ 写真撮影／志摩大輔

【講評】
 奨励賞にこの作品は選ばれた。だが、笑例賞のほうがふさわしいという声も、審査の席ではとんでいる。私じしん、これには苦笑させられたものである。
 設計の焦点は立面にある。いや、立面にしかないと言ってもいい。よく、この仕事で建築の賞レースへエントリーする気になったものだ、と、感心する。生まじめおかたい審査員なら、頭からはねつける可能性もある。
 応募者は、しかし京都賞ならいけると判断したのかもしれない。頭のやわらかい顔触れがそろっている。ここなら、賞のありかたじたいを問うような案も、俎上にのぼりうる。そう期待もしていたのではなからうか。ならば、こたえたいものだという想いがわれわれ、少なくとも私にはあった。
 小さい仕事である。しかし、街へくりだす人々の足を、ここはたしかに止めていた。建築はささやかな工夫で市民に効果をおよぼしうる。そのことも、かみしめさせてくれた。
 (井上章二)

葵の家

設計者：岸川謙介・小寺彩子／一級建築士事務所 akk

【講評】
 外壁の大半はガラスである。しかも、床から天井までとどくガラスで、全体がかこまれている。その意味では、ガラスの家があらたな形で提案されていると、言えなくもない。
 住宅街の中になつていて、住み手のプライバシーはまもられている。南側と西側の道路に面したところは、生け垣で視線がさえぎられた。低く下る傾斜屋根も、その効果をたすけている。
 東側は別居家族の住居なので、視線を開放しても問題がない。ガラスの家は、モダンデザインの舞台のみならず、現実の住宅地でもなりたつ。そのことをしめしてくれる実例だと考える。
 家具には、骨董品が多い。それが、光にあふれた空間の中で、存在感を発揮している。陰影礼賛とは反対の方向で、アンティークをかがやかせる手立てもある。この作品は、その可能性もおしえてくれた。
 (井上章二)



所在地／京都市左京区 敷地面積／275.91㎡ 構造規模／鉄骨造 2階建て
 用途／専用住宅 建築面積／118.08㎡
 竣工／2022年1月 延床面積／143.29㎡ 写真撮影／山田圭司郎

第12回 京都建築賞

藤井厚二賞 結果発表

主催 一般社団法人京都府建築士会
後援 京都府・京都市・宇治市

藤井厚二賞

「松ヶ崎のマルシェ」／借家生活 4.2
設計者 駒井貞治（駒井貞治の事務所）

現地審査選出作品

静原村の家

設計者 森田一弥（森田一弥建築設計事務所）

出雲路路地の家

設計者 中西ひろむ（中西ひろむ建築設計事務所）

京都祇園 うなぎ四代目菊川

設計者 前田圭介、林 操輝（株）UID

末富 青久カフエスタンド

設計者 田中亮平（株）G ARCHITECTS STUDIO

〔審査委員〕

松隈 章（二社）聴竹居倶楽部代表理事

萬代基介（萬代基介建築設計事務所）

奥谷繁礼（株）奥谷繁礼建築研究所

藤井厚二賞は、幾多の実験住宅の計画を通じて卓越した洞察力、探究心、行動力をもとに新しい建築のあり方を追求した藤井厚二氏に敬意を表し、先人の叡智に学び、新たな挑戦をしている建築士の飛躍の一助となることを意図しています。

今回のテーマ「やぶる」には、8作品の応募があり、3月5日の書類審査により現地審査対象の5作品を選出。4月8日に現地審査を行い、慎重な議論の結果「松ヶ崎のマルシェ」／借家生活 4.2 が藤井厚二賞に選出されました。

2024年 藤井厚二賞 講評(審査経過)

2016(平成28)年度の第4回京都建築賞から次代を担っていく建築士の支援を目的として特定のテーマを設定する新たな部門として創設された「藤井厚二賞」。実はその創設前2015年の秋に京都府建築士会の方から「藤井厚二賞」を創設したいとの依頼が私にありました。早々に藤井厚二の次女の小西章子さんに連絡をとり、ご快諾いただいたことを懐かしく思い出します。

松隈 章

【藤井厚二賞】
「松ヶ崎のマルシェ」／借家生活 4.2

「借家生活」1、2、3、4：2024 拡張編」と題された書類審査で提示されたプレザ資料から、何か面白そうな建築作品だなと想像していましたが、その予想のレベルを遙かに超え驚かされた「やぶる」作品でした。現地審査で訪れた「借家生活 4.2」は、左京区松ヶ崎のまさかこんな敷地に家は建たないだろうと思えない泉川に隣接する僅か奥行き3m、長さ約50mの狭小変形なヘタ地に、列車のように連結されて建てられた姿と、そこに夫婦と子供4人と犬が10数年暮らしてきたことに驚かされました。自身が見つけ出したヘタ地に平屋建を建てるクライアントを自ら見つけて建て、ギャラリイとした後に、借家生活1〜3で使用した梁柱の木造部材を持ち込み、家具のように組み込んで「借家生活 4.2」としています。「所有する」「ヘタ地には住めない」「高さの無い空間は2階建てにできない」などの既成概念や常識をまさに「やぶる」住宅であり、おそらくは藤井厚二もそうだったように「やぶる」ことを許容し愉しんで暮らしてきた奥様と子供たちの逞しさにエールを送りたく「藤井厚二賞」を贈ります。

たる地道な取り組みは、薨が続く魅力的な街並みを留めながらも過疎の進む静原村の谷あいの集落に確実に新たな外気を吹き込んできている。個々の建築細部の取り組みはいずれも大変魅力的なものとなっているが、未だ4棟の範囲に留まっていると思えた。藤井厚二が未完に終わった大山崎・谷田地区に創り上げようとした理想の住宅地の先を示す、地域住民を巻き込み、広く集落全体に波及し、地域の衰退を「やぶる」活動に繋がっていくことを期待したい。

【出雲路路地の家】

回を重ねて第9回目を迎えた「藤井厚二賞」の審査員を思わず指名され、いずれもこの賞の受賞者で建築家の集谷繁礼さんと萬代基介さんと私の3名で審査を担当することになりました。

京都市出雲路の入り組んだ路地に面した建築家の自邸。敷地の向かいにあった数軒の家屋が更地になっていて応募時点の資料とは街並みが大きく変化していた。大きな開口部から光が降り注ぎ、スケルトン、インフィル的な木造の列柱で構成された力強い構造体と藤井も提唱した「一屋一室」の緩やかに連続する気持ちの良い住空間が丁寧に創り上げられている。しかし、木の列柱のサイズが太く、ピッチがあまりに細かく過剰で、ちいさな空間にはあまりに重すぎる感じがした。藤井が大切にしたスリムでコンパクトを目指した「やぶる」取り組みを期待したい。

【京都祇園うなぎ四代目菊川】

伝建地区・祇園の新橋通と白川筋に挟まれた明治初期の町家茶屋を鰻屋へ転換するプロジェクトである。かなり傷みの激しかった既存状態を綿密に調査し読み解いたうえで、現代的な飲食店として見事に再生している。遺したところも改修・改造を加えたところも、いずれもがきちんとデザインされ違和感なく次代へ引き継いでいける現代的・未来性を具備できているところに日本の文化を「まもる」真摯な想いを感じた。

一方で、白川筋側に面して駐車場だった部分を新たな庭として整備した部分に、いわゆる京町家にはない「やぶる」空間の実現を期待していたのだが、そのレベルには至っていないと感じた。次作での挑戦に期待したい。

2023年12月に審査員3人が集合してテーマ設定のための意見交換を行いました。最初に松隈から最近の研究で明らかになった藤井厚二が追及した「日本の住宅」と言う考え方と最終形として実現した「聴竹居」さらに注文住宅の代表作「八木邸」などについてご紹介し、その後、議論の末に今年のテーマを「やぶる」としました。そして、後日行った書類審査の末に選んだ5つは、全く異なったタイプの「やぶる」作品となりました。

【静原村の家】

京都市北部に位置する静原村に自身の住居と事務所他を確保するために古民家をリノベーションした4棟の建築群。16年にわたる地道な取り組みは、薨が続く魅力的な街並みを留めながらも過疎の進む静原村の谷あいの集落に確実に新たな外気を吹き込んできている。個々の建築細部の取り組みはいずれも大変魅力的なものとなっているが、未だ4棟の範囲に留まっていると思えた。藤井厚二が未完に終わった大山崎・谷田地区に創り上げようとした理想の住宅地の先を示す、地域住民を巻き込み、広く集落全体に波及し、地域の衰退を「やぶる」活動に繋がっていくことを期待したい。

【末富青久カフェスタンド】

隣接する飲食店の下家のような部分にあったお弁当屋さんが廃業して物置になっていたどうしようもないようなヘタ地に建つ

私自身初めて行なった建築賞の審査でしたが、見学させていただいたどの建築もそれぞれの建築に対する熱い思いを感じることで、学びことも多い、非常に充実した楽しい審査会でした。設計者様には本当に感謝申し上げます。それぞれの建築について感じたことを下記に記します。

【静原村の家】

美しい集落の中に、ほんやりとした境界で、生活と生業が緩やか入り込んでいる状態が強く印象に残った。空き家が増える中で少しずつ拡張していくことで、街の中に不思議と開かれた領域としてそれはあった。大きな倉庫には様々な建材がストック

され、地域で出てきた廃材が薪として集まってきたりする。家や仕事場を超えて、地域の新しい循環を生み出す存在にとても可能性があるように感じた。建築家という職能を持った人間が小さな集落に入り込んだ時、今後さらに街に変化が生まれていくのではないかと期待を持った。

【松ヶ崎のマルシェ】／借家生活 4.2

豊かさとは何か、という根本的な問いを発している建築であった。敷地に行くと、そのスケールに衝撃を受けた。想像よりも大分小さな小屋のような建築が並んでいた。本当にここに人が住んでいるのであるのか。隣家の物置のようなスケールである。

萬代基介

普通の人であれば建物を建てようとは思わないような敷地であるが、設計者（住まい手）はヘタ地を探し回ってようやくこの土地に辿り着いたという。隣家からすればまさか隣に家が建つとは思っていなかったであろう。行政や隣家や銀行との折衝の末現在の建築をなんとか手に入れたという。さらにこの離散的な小屋のような建築で、4人の子供を育てたと、とても楽しそうに語っていた。

仮にどのような極限的な環境であつても、自分の力でどうにか心地よい空間に変えていけると、作者の借家生活経験からくる自信と、人間が本来持っている野生的な順応性に驚嘆する。それは、家とは何

か、豊かとは何か、所有とは何か、という問いで、私自身が揺さぶられるような、強度を持っていた。

全く型にはまっていない。ただ意図的に破ろうとしているわけではない。本能的に、様々な状況と戦っていく過程で自然と破られているのだ。だから、清々しいし、新しい豊かさが生まれていると感じた。

「出雲路路地の家」

細い変形路地に面して、端正な建築が建っていた。路地を引き込むようにして生まれた、半間ピッチで並ぶ列柱による空間は、作者の説明のように町家の真壁のような不思議な空間を獲得していた。壁であり、壁でない存在が、今後の生活に合わせて、緩

やかに変わっていくであろう様が想像できた。ただ、柱が通常より過剰にある状況の構造が空間のためだけではなく、新しい構造の合理性と共に語られていたらと感じた。

「末富青久カフェスタンド」

都市に寄生するように隙間を見つけ、そこに宝石を埋め込むような愛らしい建築であった。たとえ小さな建築であっても、街の風景を変えることができるという可能性を見せてくれた。しかも建築家が行なった操作は銅板テープを貼るという最小限に抑えられ、その一点だけで、様々な状況に対して応答しながら設計を行なっている点が秀逸である。

「京都祇園うなぎ四代目菊川」

京都の中でも特に街の景観を大切にしてきた場所、丁寧に既存を活かしつつ、現代的な手法も織り交ぜながら大変美しく作り変えられていた。発掘作業のように、少しずつ埋もれていた空間を発見しながら、設計する手法が様々な時間の地層を明らかにし、新しく作られたものはその地層の上に巧妙に積み重なっていた。設計にかけられた労力を想像すると敬服する。また、店舗でありがちな、仕上げを貼るだけの改修ではなく、きちんと構造から直すことで街の財産となるようにしていることに、建築に対する作者の真摯な姿勢を感じた。

豊谷繁礼

今年度の藤井厚二賞は、応募数は多くはなかったが、何れも実際にその建築を訪れたいと思われざるものであり、非常にレベルの高いものであったと感じている。また、たまたまであろが、応募作には設計者の自邸が多かったのが印象的である。

審査についてはまず2023年12月19日に審査委員3名が京都に集まり、テーマを「やぶる」と決め、また審査の方針についても確認された。その際、審査委員の一人である松隈章さんより藤井厚二の思想とその実践についてのレクチャーがなされた。応募は2024年2月28日に締め切られ、3月5日に松隈さんと豊谷は京都にて対面で、萬代基介さんはオンラインで集まり書類審査を行った。応募9作品のうちの1作品が、その竣工年について応募規定に適合するの議論されたが、その作品名からも対象とされている作品については規定に適合しているだろうことが確認され、全9作品を審査対象とした。審査では少なくとも議論がなされたものの、最終的には全員一致で、現地審査の対象とする5作品が決定された。4月8日に、審査委員3人ともが京都に集い、現地審査が行われた。応募者

である建築士はもちろん、建築主をはじめとする関係者の多大なるご理解とご協力により、無事に対象5作品とも十分にその建築を堪能させてもらうことができた。その後、場所を移して藤井厚二賞を決定する議論を行った。それぞれが感想を述べた後、まずは3人それぞれが賞に推す作品を一つずつ挙げてみたところ、予想外に3人ともが同一の作品を挙げた。その他の候補作品としてもしっかりと比較検討したものの、やはりその作品が賞に相応しいだろうことがあったため確認され、満場一致で「松ヶ崎のマルシェ」/「借家生活4.2」を今年度の藤井厚二賞とすることに決定した。

京都市の北東部に広がる住宅地のなか、疎水沿いに歩いていると「松ヶ崎のマルシェ」/「借家生活4.2」が現れる。疎水に面した細長いヘタ地に、まるでその背後の別の住戸の付属屋のような小さなヴォリウム4棟により構成される。このヴォリウム構成は京都市の美観条例により導かれたらしい。これは設計者自身が生活する貸家である。4棟はアプローチした手前（南側）からアトリエ（応募者の設計事務所）、子供

室、主寝室+LDK、水廻りにそれぞれ充てられている。そこには、これまでの借家生活の中で、引越しとともに移動を繰り返してきた木のフレームやユニットバスなどがあらためて組み込まれていた。設計者からは、建築基準法に関する解釈や、生活に際しての様々な愉快なエピソードが披露された。長女次女三女長男の4人のお子さんが、毎朝、子供室棟を出て、屋外を通過して、一列でLDK棟に入っていく様子を思い浮かべると微笑まずにはいられなかった。設計者はアトリエ棟とLDK棟の行き来に川を渡った一般の道路を使用していたらしい。そのようなエピソードは、設計者の奥様でもある他の居住者からも披露された。

この一見変わった建築は、このヘタ地においてかかる法規に対してある種の合理性をもつて建てられたようだ。このような建築に住むのは大変そう。しかし、この住人達はこの住宅に頑張つて棲みこなすのではなく、生き生きと愉しんで棲みついているようだ。原状回復が求められる貸家生活の中で、移動できる家具として引き継がれてきた木のフレームは、現在はこの住宅

を出られた娘さん達により、形を変え、日本各地で移動花屋や移動寺小屋として活用されている。そしてこの木フレームが時にこの建築に集い開催されるのが「松ヶ崎のマルシェ」である。なんだろうこれは。貸家生活で生み出された移動式家具の概念とその可能性を大いに破つていよう。ここまでの貸家生活から、この建築での6人での生活を経て、子供が独立した現在と今後。この建築を巡る生活やその変化はとてもユニークに感じると同時に、何かが建築に棲むということの本質にも感じてしまう。「松ヶ崎のマルシェ」を含むこれまでの借家生活および現時点でのその展開は藤井厚二賞に相応しいものであり、またこの建築の射程は、応募条件で定められた竣工年の想定を遥かにやぶるものであった。

惜しくも受賞はならなかったが「静原村の家」と「京都祇園うなぎ四代目菊川」においても、竣工してさほど時間を経っていない現段階から今後より時間をかけて一層深められていくだろう周囲との関係性により、設計者の意図はより実現されていくことが期待される。

「松ヶ崎のマルシェ」／借家生活 4.2

設計者：駒井貞治／駒井貞治の事務所

藤井厚二賞



所在地／京都市左京区
用 途／ギャラリー、住宅、
仮設店舗(本屋、花屋)、
ゲストハウス

竣 工／2021年9月
敷地面積／149.39㎡
建築面積／ 63.75㎡
延床面積／ 63.75㎡
構造規模／木造 平屋建て

写真撮影／駒井貞治の事務所

出雲路路地の家

設計者：中西ひろむ／中西ひろむ建築設計事務所



所在地／京都市北区
用 途／住宅
竣 工／2021年9月
敷地面積／93.38㎡
建築面積／53.51㎡
延床面積／92.71㎡
構造規模／木造 2階建て

静原村の家

設計者：森田一弥／森田一弥建築設計事務所



所在地／京都市左京区
用 途／住宅、事務所、工房、宿
竣 工／2023年9月
敷地面積／1,652.44㎡
建築面積／521.94㎡
延床面積／790.17㎡
構造規模／木造 2階建て

末富 青久 カフェスタンド

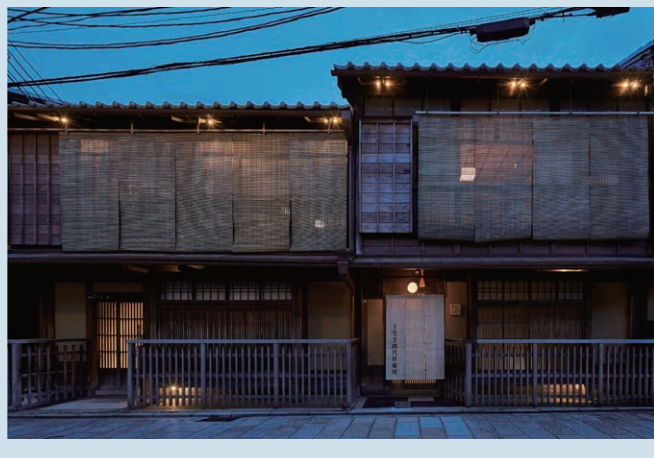
設計者：田中亮平／(株) G ARCHITECTS STUDIO



所在地／京都市下京区
用 途／物販店
竣 工／2022年10月
敷地面積／10.17㎡
建築面積／10.17㎡
延床面積／10.17㎡
構造規模／木造 1階建て

京都祇園 うなぎ四代目菊川

設計者：前田圭介・林 操輝／(株) UID



所在地／京都市東山区
用 途／飲食店
竣 工／2023年8月
敷地面積／412.76㎡
建築面積／160.80㎡
延床面積／192.40㎡
構造規模／木造 2階建て